

モンテーニュにおける模倣と忘却

自然との類比的関係とその起源

加藤 広和

はじめに

モンテーニュの『エッセー』は、なによりもその題材として著者である自己自身を扱ったという点に特徴がある。そして実際、『エッセー』は自己の絶えざる探求の過程そのものを読者に提示してくる。一方で、明示的・暗示的を問わず文中に埋め込まれた多数の引用からも明らかのように、この作品は数多くの先行する作家たちの作品を利用して書かれている。それにもかかわらず、「この本は私自身である」というモンテーニュの主張は読者に対して強い説得性を持っている。したがって、『エッセー』において真に特徴的なのはそれが自らを題材としたということよりむしろ、他人の言葉を糧にしながらか、それでいて自らのものといえるエクリチュールを生み出すことに成功したという点にあると言えるだろう。

他人の言葉を糧にして独自のエクリチュールを生み出すという試みは、ルネサンスの端緒から人文主義者たちが追い求めてきた理想でもあった。ルネサンス期に入って古典修辞学の知識が一般的になると、人文主義者らの古典の受容もその影響下に置かれることになった。そこでは模倣という過程が創作の出発点として重視され、理想の模倣のあり方について人文主義者たちは議論を戦わせてきた。『エッセー』は16世紀末のフランスという、地理的・時代的にもルネサンスの終端近くに書かれたが、そこで示された模倣への態度は人文主義者たちの議論を引き継ぎつつも、それをさらに先鋭化させたものとなっている。本論考では、そのようなモンテーニュの模倣への態度がどのようなものであり、いかにして可能になったのかを示すことを目標とする。そのさい、そのモンテーニュの模倣への態度が、彼がルクレティウスを通じて形成したある種の自然観と緊密なつながりをもつということ、そしてその二つの問題が互いに共通するトポスを介して接続されたということを示したい。

キケロ主義論争

まずはモンテーニュに先行する人文主義者らが模倣に対してどのような議論をしてきたかを確認しておきたい。この問題を考える上で重要なのが、キケロの模倣を巡る論争、いわゆるキケロ主義論争である¹。

キケロ主義論争の始まりは、一般にパオロ・コルテージがポリツィアーノに宛てて送った書簡集に対するポリツィアーノの返信に始まるとされる。コルテージはキケロの様式で書かれた書簡集を編み、それを師であるポリツィアーノに送る。しかし、それに対してポリツィアーノが非常に批判的な返信を送るのである。コルテージはいわゆる「キケロ主義者」としてキケロを散文の完成形とみなし、理想の散文を書くためにはキケロを完璧に模倣することが必要だという立場を取る一方、ポリツィアーノはキケロの散文の素晴らしさは認めるものの、同時にそこには欠点もあることを指摘し、理想の散文を書くためには複数の作家を折衷的に模倣することが必要だと唱えたのである。

ここで興味深いのは、その折衷的な模倣を主張するポリツィアーノの論点として、著者の個性が持ち出されている点である。盲目的な模倣を戒める古典を引き合いに出したあと、ポリツィアーノはこう言う。

「お前はキケロを描き出していない」と言うものもいるかもしれませんが。だからなんだというのでしょうか？ 私はキケロではないのですから。思うに、私はむしろ自らを描き出しているのです²。

ここでポリツィアーノはキケロの文体はキケロに特有のものであって、われわれはわれわれに固有の文体を見つけるべきであるという議論を提示しているのだ。

¹ 以下、キケロ主義についての記述は主に榎本武文「ルネサンスにおけるキケロ主義論争」『一橋大学研究年報 人文学研究』第36号、1999年、p. 269-333による。

² *Ciceronian Controversies*, ed. Joann Dellaneva, Cambridge (Massachusetts), Harvard University Press, « the I Tatti Renaissance Library », 2007, p. 2 : « Non exprimis, inquit aliquis, Ciceronem. Quid tum? Non enim sum Cicero. Me tamen (ut opinor) exprimo ». « exprimo »という動詞が再帰的に用いられたのはこの箇所が最初であるという指摘もある (Martin L. McLaughlin, *Literary Imitation in the Italian Renaissance*, Oxford, Oxford University Press, 1995, p. 203)。ただし、この一文はあくまで折衷的な模倣による自己表出を説く文脈に置かれているのであり、内発的な自己表現の宣言とすることはできないという点には注意が必要である (榎本武文「ポリツィアーノの「自己表現」について」『言語文化』第36号、1999年、p. 67-76 参照)。

この論争は当事者を変えて引き継がれ、1528年にはエラスムスが『キケロ主義者³』と題された対話編をものしたことで、議論の場がイタリアを超えて広がっていく。その『キケロ主義者』でエラスムスは様々な論点からキケロ主義を批判する。そこには例えば文献学的観点（キケロの文章とされる模倣対象の真正性に対する疑義）やキリスト教的観点（古典作家の語彙でキリスト教徒が語ることの矛盾）などが含まれるが、先ほど注目した、文体の固有性という問題も展開されている。エラスムスによると、もしわれわれがキケロを完全に模倣しようと思ったら、単に文章を真似るだけでは不十分であり、血肉を持った書き手としてのキケロをも模倣せねばならないとされる。「もしわれわれが描くマルクス・トゥッリウス〔・キケロ〕の似姿が、生命も、行動も、感情も、腱も、骨も無ければ、われわれの模倣はこれ以上なく力のないものになろう⁴」。文章とは、現実存在としての書き手から分離することはできないからである。しかし、今を生きるものには血肉を持つ存在としてのキケロを模倣することは不可能である。「わたしたち一人ひとり生まれつき固有の性格を持つ。その性格の力は非常に強いため、ある種の話し方に適して生まれたものが、それを変えようとしても無駄である⁵」。したがって、目指すべきはキケロの文体の模倣ではなく、独自の文体を作り出すこととされる。「キケロのすべてを表現しようとするならば、きみ自身を表現することはできない。そしてきみ自身を表現しないのであれば、きみの弁論は偽りの鏡となる⁶」。そしてそのためには、キケロだけではなく複数の著作家を模倣する必要があるとされる。「様々な著作を継続的に読んで吸収したものは、

³ エラスムスの『キケロ主義者』には主要な校訂版が二つある。初版（1528年3月）を底本とするアムステルダム全集版「*Dialogus Ciceronianus*», ed. Pierre Mesnard, in *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, vol. 1-2, Amsterdam, North-Holland Publishing, 1971, p. 581-710（以下 ASD と表記）、及び第三版（1529年10月）、第四版（1530年3月）を底本とする *Il Ciceroniano o dello stile migliore*, ed. Angiolo Gambaro, Brescia, La Scuola, 1965 である。また、モンテーニュは1529年3月の第二版を所蔵していたことが知られている（久保田剛「『キケロ派』から『エッセー』へ：モンテーニュの文体論」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第12号、2003年、p. 36、n. 16）。したがって、本論考では ASD を底本とし、異読がある場合は第二版の読みに従うこととする。ただし、ASD には多くの誤植が指摘されている（榎本武文「ルネサンスにおけるキケロ主義論争」、p. 323-324、n. 83）。そのため、Ijsewijn 及び榎本による正誤表（Josef Ijsewijn, «Castigationes Erasmi», *Humanistica Lovaniensia*, n° 27, 1978, p. 302-304 及び榎本、前掲論文、p. 328-333）を適宜参照した（ただし今回の引用箇所については誤りは指摘されていない）。

⁴ ASD, p. 630.

⁵ ASD, p. 647.

⁶ ASD, p. 649.

しっかりと消化し、記憶や単語帳ではなく、きみの精神の内奥へと根付かせねばならない。そうすれば、文才はあらゆる類の糧に養われて、あの花やこの葉、この草といったものの匂いがせず、君自身の精神の素質や性向に属する弁論が自ずから生じるだろう⁷。

このエラスムスの主張はポリツィアーノの議論の延長にあるが、テキストとその著者との不可分性を主張し、やがて来るべき、作者に固有の、作者そのものの体現としてのテキストという認識を準備するものであろう。しかし、これらの議論には重要な点が欠けている。それはすなわち、いかにして他者の言葉を自分のものにするのか、というまさにその過程についてである。他人の言葉を研究し、それを自分のものにするという過程は、厳密に考えるならば剽窃行為と峻別することが困難である。古典作家を新たな権威とした人文主義者たちは、そこに書かれているように先人を模倣する必要に迫られながらも、それを剽窃することもできないという板挟みに置かれていたのだ。

人文主義的ジレンマ

古典作家の権威と模倣という人文主義的ジレンマは早くもペトルルカに見て取ることができる。ボッカッチョに宛てたある書簡で、ペトルルカは最近知り合って面倒を見ている若い詩人について書いている。その詩人は才能にあふれていて、ウエルギリウスを誰よりも評価し、模倣している。そこでペトルルカは、その若い詩人に伝えた理想の模倣の仕方について語る。

彼はきっと、精神も文体もしっかりしたものにし、多くのものをもとにして彼自身の、固有のものを創り出すでしょう。そして、模倣を避けるというよりは隠すようになるでしょう。そうすればなにかの亜種に見えることもなく、古いものから何か新しいものを「イタリアにもたらした」ように見えることでしょう⁸。

模倣する者は、彼が書くものが似てはいても全く同じにはならないよう気をつけねばなりません。また、その類似性は肖像がそのモデルに似る時のようなも

⁷ ASD, p. 652.

⁸ Francesco Petrarca, *Familiarium rerum*, XXIII, 19, in *Le Familiari*, a cura di Vittorio Rossi, vol. 4, Firenze, G. C. Sansoni, 1942, p. 205. 鉤括弧の個所は引用元では隔字体。

のではなく（そこでは似ていれば似ているほど職人は称賛されます）、息子が父親に似るときのようなのがふさわしいのです⁹。

したがって、他人の発想や文彩は利用するべきですが、言葉そのものは避けるべきなのです¹⁰。

模倣とは、似ているようで同じではないという微妙な関係を作ることであり、それは創作において重要だが、隠すべきものともされる。なぜならあからさまな模倣とは下手な模倣、猿真似に過ぎないからなのだが、同時に、模倣行為の本質的な犯罪性の証左でもある。優れた模倣とは露見しなかった模倣、誰にも気づかれなかった窃盗にほかならない。

だからこそ、この手紙の最終部で、この若き詩人から自分の詩句にウエルギリウスと全く同じものがあることを指摘されたペトラルカは狼狽するのである。この事実をボッカッチョに伝えるペトラルカは、あたかも犯罪が露見して大事になる前に自白しているかのようである。手紙の末尾で、ペトラルカはボッカッチョに対して一緒にウエルギリウスに許しを乞うよう頼む。

最後に、私とともに、どうか気分を害さないでご寛恕いただきたいとウエルギリウスに祈ってください。彼はホメロス、エンニウス、ルクレティウス、あるいは他の多くの作家からしばしば盗んでいます、私はといえば決して盗んだわけではなく、少しばかり不注意だっただけなのですから¹¹。

ここでペトラルカが言い訳がましく言うように、古典作家は模倣を推奨し、そしてそれを実践していた。しかし、いまや古典作家に大きな権威を付与したルネサンスの人文主義者には、それを堂々で行うことはできず、なるべく露見しないよう巧みに行き、もし明るみに出た場合にはただ許しを請うしかないのである¹²。

⁹ *Ibid.*, p. 206.

¹⁰ *Ibid.*, p. 206.

¹¹ *Ibid.*, p. 207.

¹² マルク・フマロリはペトラルカが直面したこの相克が詩人のアウグスティヌス受容に起因すると指摘している (Marc Fumaroli, *L'Âge de l'éloquence*, Genève, Droz, « Titre courant », 2009, p. 78-79)。

記憶力の悪さ

モンテーニュは、このような模倣についての議論をおもにエラスムスを経由して引き継いだ。しかし、モンテーニュはその議論において重要な一步を踏み出し、テレンス・ケイヴが「もはや戻ることのできない地点¹³」と形容するような立場を取るようになる。その重要な一步こそが、忘却であった。

モンテーニュは『エッセー』のなかで、しばしば自らの特徴として記憶力の悪さを挙げている。そして、その記憶力の悪さこそ、他者の言葉から個人的なエクリチュールを生み出す過程において重要な役割を果たしているのである。ここでは先行研究をもとに、その忘却の役割を確認しておきたい¹⁴。

例えば、『エッセー』第一卷第九章「嘘つきについて」は次のように始まる。

記憶力について話すのに、これほどふさわしくないものもいまい。というのも、わたしは自分のうちにその痕跡すら見いだせず、世間にこれほど欠陥に満ちたものも他にないと思うからである。私はほかの点ではすべて凡庸で人並みだが、このことに関しては並外れて非凡であり、名声や評判を得るに値すると思う¹⁵。

ここでモンテーニュは自らの記憶力の悪さを宣言するが、決してそのことを純粋に咎められるべき欠点と考えているわけではない。実際、ここから始まる「嘘つきについて」の章では、プラトンを引き合いに出して記憶の必要性をいったん認めた直後に「経験上、反対に、素晴らしい記憶力はつたない判断力と結びついていることがよくある¹⁶」と言って記憶力を無能力と結びつけ、以降は記憶力の悪さのアポロジーが展開されるのである。

このような傾向は、モンテーニュが記憶と自らのエクリチュールについて述べた次のような箇所で一層明らかになる。

¹³ Terence Cave, « Ancients and Moderns: France », in *The Cambridge History of Literary Criticism volume 3 The Renaissance*, Cambridge, Cambridge University Press, 2006, p. 419.

¹⁴ モンテーニュの記憶力の悪さ全般については Françoise Charpentier, « L'Amnésie de Montaigne », *Europe*, n° 729, 1990, p. 26-38、またそれがモンテーニュのエクリチュールに果たした積極的な役割については Teresa Chevolet, « « Si excellent en l'oubliance » : oubli, humanisme, écriture chez Montaigne », *Étude de lettres*, vol. 276, 2007, p. 323-346 を参照。

¹⁵ Montaigne, *Les Essais*, éd. Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, I, IX, « Des menteurs », p. 55.

¹⁶ *Ibid.*, I, IX, « Des menteurs », p. 55.

記憶に頼れば頼るほど、わたしは自分を失ってしまい、様子がおかしくなる。あるときなど、自分が記憶に捕らわれているのを隠すのに大変な苦勞をしたことがある¹⁷。

記憶に頼りすぎると「自分を失って」しまう。記憶はモンテーニュを束縛し、自由を奪う。モンテーニュにとって記憶とは、古典的な修辞学の理論に反して、話すべき材料を提供するものではなく、自由な発言を妨げる枷として認識されているのだ。そのことは話す時だけではなく、書く時にも同様である。

私はものを書くときには、書物の同伴と記憶はなしで済ます。私の書き方を邪魔するといけないからだ¹⁸。

記憶はモンテーニュのエクリチュールを阻害し、そこに不純物を持ち込む。モンテーニュという「わたし」が自由に書くためには、記憶はわきに置かれねばならない。

モンテーニュのこのような記憶観は先行する作家の作品に対峙した時も変わらない。そのことが最も鮮明に表れているのが第一巻第二五章「子供の教育について」である。この章でモンテーニュは知り合いの夫人に宛てて子供の理想的な教育法について語るが、その過程で古典古代の作者との関係の持ち方も説くことになる。はじめモンテーニュは謙虚な身振りをみせ、時として自分が思いついたことが古典の中に見出されると自分がみじめに思えるという¹⁹。そして、剽窃は、剽窃されたものと剽窃者との対比によって、剽窃者の力量のなさを露呈する結果に終わるとされる。しかし、しばらくすると、モンテーニュは剽窃してきたものと渡り合おうとする野心を明らかに始める。

とはいえ、私は自分がどれだけ不遜なことをしているかは分かっています。というのも私はしばしば自身をよそからくすねてきたものと並べて、それらと渡り合おうとしているのですから。それも、そのことを見抜こうとする審判の目を欺けるのではないかという不敵な希望をもってやっているのです²⁰。

¹⁷ *Ibid.*, III, IX, « De la vanité », p. 1007.

¹⁸ *Ibid.*, III, V, « Sur des vers de Vergile », p. 917.

¹⁹ *Ibid.*, I, XXV, « De l'institution des enfans », p. 151.

²⁰ *Ibid.*, I, XXV, « De l'insitution des enfans », p. 152.

剽窃、あるいは単純な借用は作者の力のなさを顕わにするという議論がここで逆転し、力の差が明白に見て取れないのなら剽窃は免責される、というよりは、もはやそれは剽窃とは呼ばれず、作家が古典を「自らのものにした」とみなされるようになる。モンテーニュはそのことが剽窃の延長線上にあるということを認識したうえで、できるだけそれを巧みにやってみようと言っているのだ。そして、ひとたびその過程が完了したならば、モンテーニュはそれがどこから来たのかということをおぼろげに忘れるように勧める。

というのも、もし彼〔生徒〕がクセノフォンやプラトンの意見を、彼自身の考え方に従って抱いたならば、それはもはやクセノフォンやプラトンのものではなく、生徒のものなのです。〔…〕教を学ぶのではなく、その本質を染み込ませねばなりません。そしてそうしたければ、思いきってそれをどこから手に入れたかということは忘れてしまってもかまいませんが、それを自分のものにしなくてはならないのです。真理や理性は人々に共通のものであって、最初に言った人のものだったり、後から言った人のものになったりはしないのですから²¹。

ここにきてモンテーニュの主張は頂点に達する。すでにみたように、記憶はモンテーニュのエクリチュールを阻害するものであった。しかしそれは、自分のうちから、全くの無からエクリチュールが生み出されるということの意味しない。モンテーニュは書くときに今まで自分が読んできたすべての作品の声を聴いている。しかしその声は、ひとたびモンテーニュが読んだあとは、その作者の名をはぎ取られ、忘れ去られ、その総体が再び形をとるのは「モンテーニュ」という新たな名のもとにおいてなのである。まさにここにおいて『エッセー』のエクリチュールが始まっている。テレーザ・シェヴロレはこの忘却を「解放するものとしての忘却 *l'oubli libérateur*」と呼び、その働きを次のように述べている。「解放するものとしての忘却は、それが作り出す空隙によって、また、細かな事実を消し去る事によって、文化の中に「私」がそっと忍び込むことを許し、個人が息をすることのできる処女地を拓くのである²²」。この忘却という操作によって、モンテーニュは人文主義者らが直面していたジレンマを乗り越えたのだ。

²¹ *Ibid.*, I, XXV, « De l'institution des enfants », p. 157.

²² Chevrolet, art. cit., p. 327.

生成と消滅のトポス

では、この忘却という一步はいかにして可能になったのだろうか。ここで注目したいのは、模倣の問題を語るときに用いられる比喩である。人文主義者たちは模倣の問題について語るときに、古典古代の作家から借りた定型的なアナロジー、いわゆるトポスを用いる。なかでも、ここでとくに問題になっている、言葉を「自分のものとする」過程の成功例を示すときに使われるのが「親と子の類似」と「食物の消化」の二つの比喩である²³。これらの比喩はすでにいままでに検討した箇所にも出ており、親子の類似についてはペトルルカが、食物の消化についてはエラスムスが用いている箇所が引用されている。このような定型表現をモンテーニュもまた利用しており、例えば先に見た「子供の教育について」の章などで確認できる。

ここで重要なのは、モンテーニュがこの同じ比喩を、別の問題を扱うときにも用いているという点である。特に初期のエッセーに特徴的だが、モンテーニュはたびたび、世界のすべての物事は消滅し、その死を糧とする別のものに取り替わられるという世界観を表明する。たとえば第一巻第十九章「哲学するとは死ぬことを学ぶこと」では、擬人化された「自然」の口を借りてそのような世界観が長きにわたって語られる。その箇所は次のように始まる。

自然はこのように言う。この世界から、入ってきたときのように出ていきなさい。死から生への道のりと同じように、熱情も、恐れもなく、生から死へともう一度やり直さない。あなたの死は世界の秩序の一部であり、世界という生の一部なのです²⁴。

このような姿勢は『エッセー』を通じて一貫して表明されている。そして、その過程で模倣について語るときに使われたのと同様の比喩が用いられるのである。

食物の比喩に関しては、コリン・ディクソンによる指摘が注目に値する²⁵。ディクソンによると、「経験について」においてモンテーニュの肯定する現

²³ 主要なトポスとそれぞれの担っていた役割については George W. Pigman III, « Versions of Imitation in the Renaissance », *Renaissance Quarterly*, vol. 33, n. 1, 1980, p. 1-32 を参照。

²⁴ Montaigne, *op. cit.*, I, XIX, « Que Philosophe, c'est apprendre à mourir », p. 94.

²⁵ Colin Dickson, « L'invitation de Montaigne au banquet de la vie : « De l'Expérience » », in *Mélanges sur la littérature de la Renaissance à la mémoire de V.-L. Saulnier*, Genève, Droz, « Travaux d'Humanisme et Renaissance », 1984, p. 505.

世的生は饗宴のイメージを使って語られる。たとえば、肉体的な快を忌み嫌うものに対して言われた、次のような箇所だ。

身体が食卓にあるというのに精神は雲の上にやれと命じられるのは気に食わない。なにも精神をそこに釘付けにしたり、寝そべったりさせたいわけではなく、そこに集中してほしいのだ。座ってほしいのであって、寝転がってほしいのではない²⁶。

さらに、モンテーニュは生そのものに対して、食事に関する語彙を用いることが多い。そしてモンテーニュはいま自らが開陳する自らの経験及びそれに基づく『エッセー』のことも、食物になぞらえる。

わたしは十分長く生きてきたので、こんなところまでわたしを導いてきた習慣を開陳してもよかろう。それを味わいたい人のために、お酌係として試しておいたのだ²⁷。

そして、そのようにして生を「味わった」モンテーニュは、それを排泄する。

なにか大きな石がわたしの腎臓の髄を傷つけ、消費している。それにわたしの生命も、わたしは少しずつ空にしていつている。〔わたしの生命は〕今となっては余計で邪魔なだけの排泄物のようで、自然な快感がないとはいえない²⁸。

このような例を踏まえて、ディクソンは「このエッセー〔「経験について」〕における食物の比喩は、自然のサイクルの一環としての死を受け入れることを促し、死を前に慰め、気を落ち着けさせるような、ひとつの（議論とまではいわずとも）視点を提供するのに寄与している」と述べている²⁹。つまり、食物が食べられ、消化され、排泄されるという一連のプロセスは、成功した模倣のアナロジーであると同時に、自然のあり方を示すアナロジーでもあるのだ。

さらに、親と子の関係もまた、モンテーニュにとって物事が自らの死によって新たな生の誕生を用意するプロセスの一環として認識されていた。現実の親子関係についてモンテーニュは、子供が育ち、生きていくためには親が死ななければならないと説く。

²⁶ *Ibid.*, III, XIII, « De l'Experience », p. 1157.

²⁷ *Ibid.*, III, XIII, « De l'Experience », p. 1127.

²⁸ *Ibid.*, III, XIII, « De l'Experience », p. 1144.

²⁹ Dickson, art. cit., p. 505.

早くこの世を去れと言わんばかりに子供がわたしたちのかかどに付いてくるのが、わたしたちには気に食わないのですが、そういったことを恐れねばならないなら、親になろうなどとするべきではないのです。というのも、ほんとうを言えば、ものの理として、子供たちはわたしたちの存在と生命とを犠牲にしない限り存在することも、生きることもできないのですから³⁰。

子供というものは、親の犠牲なしには生きていくことができないとされる。もちろん現実的な水準で言えば、それは子供というものは経済的に自立していない以上、親の財産を消費する必要があるということではある。しかし、ここでモンテーニュが言っているのはそれ以上のことである。親は子の成長のためには「存在と生命」を犠牲にしなければならない。しかもそれは「ものの理」による。ここで示されているのは、上の食物の比喻を通じて伝えられていたのとまったく同様の態度である。存在が親から子へと受け継がれていくそのプロセスは、食物が消化され別の存在の糧になると同様に、自然のあり方のあらわれとされている。

そして、これら二つの例を総合する存在として食人種に対する態度がある。モンテーニュにとって、食人種においてはこのような世代交代のあり方、親の死が子の誕生をもたらすという認識に従った生き方が完璧に実現されている。モンテーニュが食人種たちの世界に対して、自然に従っていて野蛮なところなど微塵もない、と評価することの背景には、食人種らがこの自然の法則に従っているという認識があるのではないだろうか。それは、食人種同士の違いにおいて捕虜となったものが歌う言葉への次のような評価から見て取ることができる。

ある捕虜が作った歌があるが、そこにはこういう表現がある。「みなのもの、勇気を出してこっちにこい、そして俺のもとに集まって俺を食うがいい、そうすれば、俺の体の食物であり栄養になった、お前たちの父親や祖父をもろともに食うことになるのだからな」。そしてこういうのだ。「この筋肉、この肉、この血管、これらはお前たちのものだぞ、みじめなばかども。お前たちの祖先の四肢が、ここに付いているのがわからないのか。よく味わえ、お前たち自身の肉の味がするだろうからな」。まったく野蛮さのない発想ではないか³¹。

自分の身体が過去に食べた先祖のものからできていること、そしてそれがまた別のものに食べられることによって受け継がれていくこと、このような存

³⁰ Montaigne, *op. cit.*, II, VIII, « De l'affection des peres aux enfants », p. 406.

³¹ *Ibid.*, I, XXX, « Des Cannibales », p. 219.

在の連鎖が実現されているからこそ、モンテーニュはこの歌をこのように評価するのである。

これらの事例からわかるように、人文主義者が模倣について語るときのトポスと、モンテーニュがある種の自然観を表明するときに用いられる比喻は非常に近い性格を持っている。両者はともに、もととなる存在の混交、変形、死、そして誕生という過程を表しているのである。この類似によって、文学的模倣は自然のあり方のアナロジーの一種となる。そして、このような自然観のもとに模倣を捉えたからこそ、モンテーニュは文学的模倣に対してかくも大胆な態度を取ることができたのではないだろうか。

モンテーニュの中でこの二つの問題が接近していたことは、テキスト的にも見て取ることができる。第三卷第一二章「顔立ちについて」の中でモンテーニュは上で述べたような自然観を、ルクレティウスを引用しながら（字下げされた二行）表明する。

死ぬことは、生きることに劣らない、われわれの存在の本質的な一部分なのだ。
[…] それに、この世界という共同体にあって、死は喪失と破壊よりも生誕と増加に貢献しているではないか。
 斯様に万物は新しくなる：
 一つの死から千の生が産まれる
 生の崩壊は他の千の生への移行なのだ³²。

ここに表明されているのはまさしく「哲学するとは……」の章で述べられていたのと同様の自然観である。そして、このことを述べた直後に、モンテーニュは自分と他人の言葉の間の問題、引用の問題に移行するのである。先の引用に続けてモンテーニュは、ソクラテスの言葉を称揚したあと、それを実践することの困難を述べ、ひとは他人の能力を羽織るだけで、自らの能力を行使していないという。そしてそのことは自分にも当てはまるとして、次のように述べる。

わたしについてもだれかにこのように言われうる。つまり、わたしはここで他所から持ってきた花束を作っているだけで、自分のものと言えばそれを束ねる紐しかないではないか、と。確かにわたしはこのような借り物を付き従えるという、一般的なやり方に迎合している。しかし、借り物がわたしを覆い、隠してしまうようにとは全く意図していない。それはわたしの意図の正反対である。

³² *Ibid.*, III, XII, « De la Physionomie », p. 1102.

わたしの意図は、自分のものを、それも本性的に自分のものであるものしか示さないということにある³³。

モンテーニュが語っていることはすべて自分のものであり、それも「本性的に *par nature*」自分のものである。それは他人の声を借りて語っているときも変わらない。ここでモンテーニュが宣言しているのは、いまモンテーニュが他人の言葉を借りて述べたことも、みなすべて今では自分のものなのだというにほかならない。これは、「子供の教育について」の章で述べてきたような模倣論、剽窃は忘却によって剽窃ではなくなるという模倣論を前提とした議論である。他人のものを借りてきていながら、「本性的に自分のものであるものしか示さない」というのは、先人の言葉の忘却＝死によって可能となっている。そして、この議論はまさに前に引いた自然観の表明、「死は喪失と破壊よりも生誕と増加に貢献している」という話に導かれてきたのではないだろうか。自然における死と誕生のプロセスと、『エッセー』の創作過程が類比的関係にあるからこそ、ここにこの文章が置かれているのだ。ある一つの言説が読まれ、忘却され、死んだとき、次の作者によって千の新たな言説が生まれる。文学という大きな流れは、自然と同様、先人の死によって養われているのである。

「忘却と生の中断のゆえに」

このように、モンテーニュの模倣論は共通のアナロジーを通じて独特の自然観と統合されていた。そこでは忘却という過程が、自然における一個人の死のように、新たな作品の生を養う役割を担っている。最後に、この死と忘却との類比的関係がモンテーニュ独自のルクレティウス受容に起因するものであるということを確認しておきたい。

今まで扱ってきたような自然観が形成されるにあたって重要な役割を果たした作品としてルクレティウスの『物の本質について』が挙げられる。この作品は長らくその本文は失われていたが、1417年に写本が再発見され、1471年に活字化、1514年にはパリでも出版されている³⁴。1563年にはドニ・ランバンによる注釈のついた版が出版され、モンテーニュはこのランバンによる

³³ *Ibid.*, III, XII, « De la Physionomie », p. 1102.

³⁴ ルネサンスにおけるルクレティウス受容一般については Ada Palmer, *Reading Lucretius in the Renaissance*, Cambridge (Massachusetts), Harvard University Press, 2014 が詳しい。

版を所有しており、そこに多くの書き込みを残している。この書き込みを残した版は 20 世紀末に再発見され、モンテーニュによるルクレティウス受容の様子を伝える貴重な資料となっている³⁵。

さて、その『物の本質について』の中でルクレティウスが次のように言っている箇所がある。

というも君が永遠の時の過ぎ去ったすべての広がりを取り返し、
そしてものの動きがどれほど多様かを考えてみるならば、
次のことは簡単に信じられよう
原子はしばしば今あるのとまさに同じ並びに置かれていたということが
しかしわれわれはそれを精神から記憶に呼び戻すことはできない
その間には生命の中断があり、あちこちへと
偶然の〔原子の〕動きは感覚から離れてさまよっていたからである³⁶

ここで言われているのは、ひとを構成する原子が、過去にせよ未来にせよいづれかの別の時間において、いまそのひとを構成しているのと全く同じ姿を取る可能性である。ルクレティウスはそのような可能性自体は大いにあり得ると説くが、そのようにして構成された個体はひとたび生が中断された以上、記憶の連続性がないと続ける。この箇所について、モンテーニュは次のようなメモを残している。

³⁵ Lucretius Carus, *De rerum natura libri sex. A Dionysio Lambino Monstroliensis litterarum Graecarum in urbe Lutetia delectore Regio, locis innumerabilibus ex auctoritate quinque codicum manu scriptorum emendati, atque in antiquum ac nativum statum fere restituti, & praeterea brevibus, & perquam utilibus commentariis illustrati*, Paris, in Gulielmi Rouillii, Et Philippi G. Rouillii Nep. Aedibus, via Iacobaea sub Concordia, 1563. このランバンによる版にモンテーニュが書き込みを残した刊本は以下のサイトで公開されている。<http://www.bvh.univ-tours.fr/Consult/index.asp?numfiche=764> また、書き込みを活字化・近代語訳したものとして Michael A. Screech, *Montaigne's Annotated Copy of Lucretius*, Genève, Droz, « Travaux d'Humanisme et Renaissance », 1998 がある他、アラン・ルグロの編集によりプレイヤード版にも収録されている (Montaigne, *op. cit.*, p. 1188-1250 この版では個々の書き込みに通し番号がつけられている)。本論考ではルクレティウスの引用にはランバン版を用い、モンテーニュの書き込みを参照する際にはランバン版での位置 (ページが付されていない場合スクリーチ版での表記に従う)、スクリーチ版でのページ、プレイヤード版での通し番号の順に表記する。

³⁶ Lucretius, *op. cit.*, p. 251.

原子の動きは多様であるから、原子がかつて、あるいはこれから、同じように集まり、もう一人のモンテーニュを生ぜしめることはあり得る。251/ このことはわたしには関係ない。忘却と生の中断のために 251³⁷

モンテーニュのルクレティウスへの書き込みの多くは内容のパラフレーズにとどまるものが多いのだが、この箇所は、スクリーチも注意を促しているように³⁸、ルクレティウスの議論を自らにひきつけて語り直しているという点で異彩を放っている。それは直接にはランバンがこの箇所に付した注釈に影響されてのものだろうが³⁹、この議論が実際的な問題として認識されていたことの証左ともなるだろう。さらに、この書き込みからはモンテーニュがルクレティウスの議論を微妙に、しかし決定的に変形させているさまも見て取ることができる。モンテーニュは、原子が別の時間に今と同じ並びをとり、もう一人のモンテーニュをつくる可能性を述べた後、それが自分と関係がない理由として忘却と生の中断を挙げ、それらを併置している。これはルクレティウスの議論を逆転させたかのような書き方である。つまり、ルクレティウスにおいては記憶の断絶は生の中断にともなう必然的・受動的なプロセスのひとつにすぎなかったのだが、モンテーニュはそれを忘却と名指し、個体の独立性を担保する原因のひとつとして生の中断から独立させ、それと等価に並べ得るものへとしてしまったのだ。こうして、忘却はいわば疑似的な死として、個体の境界を定めるものとなる。ここに自然における生と、文学における創作とのアナロジーが完成する。忘却によって個体の連続性は中断されるという認識があるからこそ、モンテーニュは忘却を文学的模倣を免責するものとして提示する。文学において、一つ一つのトポス、文章、あるいは単語や文字は、かつてあったものと全く同じ並びをとるということはありえる。しかしそれは忘却によって過去の言説と切断されている以上、「わたしには関係ない」ものなのだ。

³⁷ Lucretius, *op. cit.*, After Flyleaf n (the verso of the third After Flyleaf) ; Screech, *op. cit.*, p. 134-136 ; Montaigne, *op. cit.*, p. 1218, n° 536 : « Vt sunt diuersi atomorum motus non incredibile est sic conuenisse olim atomos aut conuenturas ut alius nascatur montanus. 251/ Id ipsum me non tangit propter obliuionem & uitae pausam 251/ ». 引用文中の 251 とは参照しているページを示したもの。この書き込みは巻末の遊び紙に記されている。

³⁸ Screech, *op. cit.*, p. 134.

³⁹ *Ibid.*, p. 136.

おわりに

以上、本論ではモンテーニュはその模倣論において伝統的な人文主義者の理論を継承しつつ、そこに忘却という操作を組み込むことである種のジレンマを解消し、より自由な創作を可能にしたということ、そしてその忘却の導入はモンテーニュによるルクレティウス受容に起因し、その兆候はごく初期の読書メモのうちに読み取ることができることを示してきた。これによってモンテーニュが『エッセー』において実現した「わたし」を描くという試みがいかにして可能になったのかという問題を明らかにできたのではないだろうか。ここで明らかにしたようなモンテーニュにおける古典的記憶からの逸脱は、以降の近代文学において記憶がどのような役割を担わされるかという観点からも検討されるべき課題と思われるが、それについては稿を改めることとしたい。